

〈歴史パネル〉

テーマ：1931年ポンド危機

座長 麗澤大学 佐藤 政則

パネルの主旨

本パネルでは、1930年代初頭に現出した国際金融危機について1931年ポンド危機を軸に考察する。第1報告（金井雄一）ではポンド危機の形成を、第2報告（高橋秀直）では危機の広がり、そして第3報告（鎮目雅人）では日本を対象に危機の波及とそれへの対応を論じていく。

大恐慌勃発で始まる1930年代は、国際金融危機の発生と再建金本位制の崩壊、そしてそこから脱却をめざす様々な試みが展開した時代であり、これまでも繰り返し研究者の関心を集めてきた。なかでもドルとともに再建金本位制を支えた国際通貨、ポンドの1931年危機に関する国内外の研究は、質量ともに厚い。それらの主要な視点や関心を強引に整理すれば、①再建金本位制の崩壊との関係、②1930年代の国際金融危機との関係、③1920年代から動き出す国際金融協調との関係、④「ブレトンウッズ体制」も含めた国際通貨システムとの関係、に集約されるだろう。いずれにせよ、「ポンド」に象徴されるイギリス（ロンドン）の国際的な金融機能を、能動的に観るか、それとも受動的に観るかによって景色は大きく変わるだろう。

こうした成果に依拠しながらも、本パネルではポンド危機のもつ意味を、イギリスの金融という観点から（第1報告）、またロンドン外国為替市場という観点から（第2報告）、そして周辺国＝日本の立地点から（第3報告）、各々再吟味してみたい。そのなかで、可能なならば、「危機の波及の相互性」、さらには「危機と革新のスパイラルな相互関係」という問題に議論が及べばと考えている。